

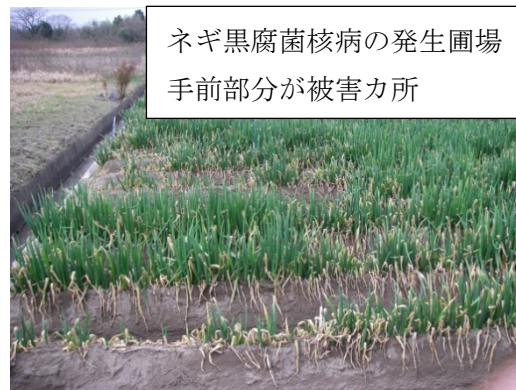
ネギ黒腐菌核病に対する土壌消毒の効果について

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

白ネギの難防除病害である「ネギ黒腐菌核病」は、2010年4月に県西部の春ネギ栽培圃場で初めて発生が確認されて以降、春どり作型を中心に年々発生圃場が増加しており、防除方法の確立が急務となっている。

そこで、ネギ黒腐菌核病に登録のある土壌消毒剤の効果について検討した。



(2) 情報・成果の要約

- 1) 6月上から中旬にディ・トラペックス油剤(40L/10a)又はバスアミド微粒剤(60kg/10a)を処理することで高い防除効果が得られる。効果を安定させるためには農ポリ等による被覆が必須である。
- 2) ディ・トラペックス油剤(40L/10a)とバスアミド微粒剤(60kg/10a)は同等の効果があるが、バスアミド微粒剤(30kg/10a)はやや効果が劣る。
- 3) バスアミド微粒剤(60kg/10a)を同一圃場で2年連続処理することにより、発病度の抑制効果を高めることができる。

2 試験成績の概要

(1) 試験方法

2014年産の春ネギでネギ黒腐菌核病が多発生した現地2圃場において、5月27日に以下の処理を行った。

圃場①：ディ・トラペックス油剤(40L/10a)、バスアミド微粒剤(30・60kg/10a)、無処理

圃場②：バスアミド微粒剤(60kg/10a)同一圃場における2年連続処理

処理後、農ポリによる全面被覆を行い(6月17日除去)、8月に定植、防除効果を2015年3、4月の収穫時に比較した。

(2) 調査方法

各区1㎡を3カ所掘り取り、葉鞘部への菌核の付着および盤茎部の黒変、軟化腐敗または枯死が認められる株数を調査し、発病株率及び発病度、可販割合を算出した。

発病度 = { Σ (程度別発病株数 × 指数) / (調査株数 × 3) } × 100

指数 0 : 健全、1 : 葉鞘部にわずかに菌核の着生を認める、盤茎部が黒変し、菌核も無数に着生、3 : 軟化腐敗または枯死

可販割合は調査株数における可販株数 (指数0と1) の割合

(3) 試験結果

圃場① : いずれの薬剤も無処理と比較し発病度が軽減された (表1)。

ディ・トラベックス油剤 (40L/10a) ≧ バスアミド微粒剤 (60kg/10a) > バスアミド微粒剤 (30kg/10a)

圃場② : バスアミド微粒剤 (60kg/10a) を同一圃場2年連続の処理により、発病度が低下し

可販割合が向上した (表2)。

表1 各種土壤消毒剤がネギ黒腐菌核病の防除効果に及ぼす影響(圃場①)

土壤消毒剤	処理量	合計 調査株数	可販割合 (%)	発病株率 (%)	発病度
ディ・トラベックス油剤	40L/10a	104	100	0.0	0.0
バスアミド微粒剤	30kg/10a	84	96.4	27.4	10.3
	60kg/10a	108	100	1.0	0.3
無処理	-	97	83.1	56.2	25.4

品種: 羽緑一本太 (平成26年8月8日定植 平成27年3月3日収穫調査)

表2 バスアミド微粒剤の同一圃場連年処理がネギ黒腐菌核病の防除効果に及ぼす影響(圃場②)

土壤消毒剤	処理量	合計 調査株数	可販割合 (%)	発病株率 (%)	発病度
バスアミド微粒剤 (H25 1年目) ¹⁾	60kg/10a	118	48.5	79.2	47.6
バスアミド微粒剤 (H26 2年連続) ²⁾	60kg/10a	132	99.3	19.8	6.8
無処理 (H25) ¹⁾	-	123	12.6	100	82.0

1) 品種: 龍ひかり1号 (平成25年9月14日定植 平成26年4月10日収穫調査)

2) 品種: 龍ひかり1号 (平成26年8月28日定植 平成27年4月14日収穫調査)

3 利用上の留意点

本試験は、弓浜砂丘地域 (砂質土壤) における試験結果であり、他の地域については別途検討が必要である。

また、処理を行っても農ポリ被覆の端部分では十分な処理効果が認められない可能性があるため、端部分への植え付けは控えるなどの注意が必要である。

4 試験担当者

弓浜砂丘地分場	分場長	中村博行
	主任研究員	谷口美保
	研究員	田村佳利*

*現 市場開拓局 農林技師